

【12 頁, 10 行目】

(誤) さまざな流儀

(正) さまざまな流儀

【52 頁, 12 行目】

(誤) $\text{suc}^{\mathcal{M}}(a) = \text{suc}^{\mathcal{M}}(b)$ になるので,

(正) $\text{suc}^{\mathcal{M}}(\mathcal{M}(a)) = \text{suc}^{\mathcal{M}}(\mathcal{M}(b))$ になるので,

これは完全に誤りとは言い切れないが, 訂正する方がよい.

【57 頁, 定理 4.1.1 (健全性定理) の文面 3 行目】

(誤) $\varphi, \psi_1, \psi_2, \dots, \psi_n$ 中に自由出現しない

(正) $\mathcal{A}$ 中に出現しない

現状でも定理の主張は誤りではないが, 証明に不備がある (たとえば $[\rightarrow \text{除去}]$ の場合に $x_1, \dots, x_k$ 以外の変数記号が ρ 中に自由出現する可能性を考慮していない). 証明を変えてもよいが, この場合は定理の文面を変える方が適切である.

【69-70 頁, 定理 5.2.1 を用いた定理 5.1.7 の証明中の (ア) と (ウ) の証明】

現状でも誤りではない. しかし次の事実を示してそれを用いて証明する方が簡潔である: 任意の閉論理式 φ について $\varphi \vdash \varphi^\#$ かつ $\varphi^\# \vdash \varphi$.

【74 頁, 9 行目】

(誤) ... どちらも Γ に ...

(正) ... どちらも Γ^+ に ...

【105 頁, 8,9 行目 (2カ所)】

(誤) 閉論式

(正) 閉論理式

【118 頁, 8.2 節 2 行目】

(誤) 「ヒルベルト流」よばれる

(正) 「ヒルベルト流」とよばれる

【151 頁, 6 行目】

(誤) 条件 (1)~(4) が

(正) 条件 (1)~(3) が

【159 頁, 定義 11.1.3 の (2)】

(誤) $\dots$ が $\text{Dom}(\mathcal{W}_i)$ の要素の名前のとき,

(正) $\dots$ が $\text{Dom}(\mathcal{W}_i)$ の要素 (の名前) のとき,

【162 頁, 定理 11.2.1 の証明の 3 行目】

(「 A の結論を $(\psi_1, \psi_2, \dots, \psi_n \Rightarrow \varphi)$ とし」の後に次を追加)

(ただし右辺が空の場合は以降の φ を $\perp$ に読み替える)

【162 頁, 定理 11.2.1 の証明の 4 行目】

(誤) $\varphi, \psi_1, \psi_2, \dots, \psi_n$ 中に自由出現しない

(正) A 中に出現しない

先述の「57 頁, 定理 4.1.1 (健全性定理) の文面 3 行目」の訂正と同じような状況である.

【165 頁および 177 頁, ダイアグラムの根の左側】

(誤) $\varphi_1, \varphi_2, \dots, \varphi_m$

(正) $\varphi_1, \varphi_2, \dots, \varphi_m$

【171 頁, 9 行目】

(誤) $\dots y$ は $\mathcal{T}_i$ に出現しない $\dots$

(正) $\dots y$ は追加前のダイアグラムに出現しない $\dots$

【171 頁, 下から 6 行目】

(誤) 以上が $\mathcal{T}_i$ から $\mathcal{T}_{i+1}$ の作り方であり, このようにしてできる列 $\mathcal{T}_0, \mathcal{T}_1, \mathcal{T}_2, \dots$ の「極限」である無限和 $\bigcup_{i=0}^{\infty} \mathcal{T}_i$ が求める飽和整合ダイアグラムになる.

(正) 以上の追加作業を $\mathcal{T}_i$ 上のすべての印に対して施した結果が $\mathcal{T}_{i+1}$ であり, こうしてできる列 $\mathcal{T}_0, \mathcal{T}_1, \mathcal{T}_2, \dots$ の累積 $\bigcup_{i=0}^{\infty} \mathcal{T}_i$ が求める飽和整合ダイアグラムになる.